

## 妊婦健診時の検査

当院では、初診時から分娩まで、超音波検査を毎回実施しております。妊娠 12 週からは血圧測定、尿検査、体重測定が加わり、さらに妊娠 38 週からは分娩監視装置（モニター）による胎児心拍のチェックを行います。また妊婦さんの健康のため、および胎児への土感染を防ぐために、次のような検査を実施しております。

### 初 回

子宮腔部細胞診（子宮がん検診）

### 妊 娠 初 期

血液型	不規則抗体	CBC（貧血の有無、白血球検査、血小板数など）
HBs 抗原（B型肝炎検査）		HCV抗体（C型肝炎検査）
RPR・TPLA（梅毒検査）		風疹抗体
HIV-1 抗体（エイズ検査）		血糖
ATLA 抗体（HTLA-1 抗体、成人T細胞白血病ウイルス抗体検査）		トキソプラズマ
FT <sub>4</sub> （甲状腺検査機能）		

### 妊娠 20 週～24 週

経膈エコーにて胎盤の位置・頸管長のチェック  
クラミジア抗原

### 妊娠 24 週～28 週

CBC・血糖

### 妊娠 34 週前後

膈分泌培養（GBS培養、カンジダ培養）

### 妊娠 36 週前後

CBC・不規則抗体スクリーニング（血液検査）

### 妊娠 38 週前後

胎児心拍モニタリング（NST）



妊娠初期に検査を他院で受けられた方は、結果の証明（検査結果の用紙、紹介状など）があればそれらの検査を省略致します。血液型、不規則抗体検査に関しては、必ず当院で検査させていただきます。

検査の内容などご質問のある方は医師にお尋ねください。またこれ以外の検査を希望される方はご相談ください。

## 妊娠中の検査について

### ABO 式・RH 式、不規則抗体の血液型

血液型には、A 型・O 型・B 型・AB 型の 4 種類があり、それに加え RH(+)・RH(-) 不規則抗体の有無等によって、分けられます。妊娠初期に血液型の検査をする事は、妊娠期、分娩時に思わぬトラブルで輸血をする可能性も考慮して、前もって数少ない血液型の場合は把握しておくことで、輸血を速やかに行う事ができます。RH(-) や不規則抗体陽性の方は、胎盤を通して血中抗体が赤ちゃんの赤血球を破壊してしまう事も考えられるため、妊娠初期に確認しておくことが必要です。妊娠 36 週にもう一度不規則抗体検査を行います。他院で血液型検査をした方は当院で再度血液型検査を行います。

### B 型肝炎/C 型肝炎

B 型肝炎・C 型肝炎ウイルスの検査は、妊婦が感染していると胎児への感染も考えられ、感染が確認できていると分娩時に母子感染を避ける為に速やかな対処ができます。

### 風疹

妊婦に風疹の抗体がない・抗体があっても低値の場合、妊娠初期に感染すると胎児の先天性風疹症候群(難聴、心疾患、白内障、精神身体発達遅延など)の発症の恐れがあります。そのため風疹の抗体価を調べます。妊娠 5 ヶ月までは風疹にかからないよう注意が必要です。飛沫感染ですので人込みに出かけるのは避け外出時はマスクを着用しましょう。

抗体がない方(8 未満)、低値(8 倍、16 倍)の方は産後にワクチン接種をすすめます。

抗体価が高い場合(256 倍以上)は最近の感染でないか再検査を行います。

### 梅毒

梅毒に感染していると、胎盤を通じて胎児への感染の可能性があるため、妊娠初期に感染を防止する為の治療が必要です。治療は、胎盤が完成するよりも前に抗生物質で行う事が重要です。

### トキソプラズマ

トキソプラズマは猫を中心として豚牛馬人に感染する原虫です。生肉を食べる、動物の糞尿に触れることで感染します。妊娠して初めて感染した場合、胎児に先天性トキソプラズマ感染症をひき

起こすことがあります。妊娠中は生肉の摂取は避けましょう。またペットの糞尿処理をするときは手洗いをしっかりしましょう。

## **HIV**

妊婦がエイズに感染しているかを調べます。感染していると、産道や母乳での感染する可能性があります。治療を行う事で、発症を防止して胎児への感染も予防できます。

## **成人T細胞白血病ウイルス抗体検査**

ヒト細胞白血病というウイルスに感染していないかどうかを調べる検査です。このウイルスは主に母乳を介して赤ちゃんに感染するため、授乳は人工栄養が勧められています。

## **クラミジア**

妊娠 20 週をこえたら、膣分泌物で検査します。

クラミジアに感染していると、妊娠中は子宮頸管炎から切迫早産になったり、母子感染症(新生児結膜炎・クラミジア肺炎)を引き起こすことがあります。性感染症です。陽性になった場合はパートナーも治療が必要になります。

## **B 群溶血性連鎖球菌(GBS)**

妊娠 34 週を超えたら、検査します

分娩時に産道を通るときにこの菌がいると、新生児に敗血症や髄膜炎を発症することがあります。赤ちゃんが産道を通る時に感染しないように、入院した時点で出産までに定期的に抗生剤の点滴を行います

## **子宮頸がん**

子宮頸部から細胞を採取してがんの可能性がないかを確認します。子宮頸がんは初期の状態ではほとんど症状がありません。細胞診に異常があれば、その後は定期的な検査が必要ですので担当医の指示を確認しましょう。